

その生活をなくしたくないし、静雄とぎくしゃくとしたくはないから、そんな言葉でうやむやにしてくれたにすぎない。そしてもちろん、静雄もこの日々を失いたくない。

だから、気づいたばかりの感情に蓋をすることにした。

そうして、その日も平和に時間が流れていった。
……お互い、少しだけこちなかったけれど、それは互いに気づかないふりをしながら。